

道博協ニュース

発行所 北海道博物館協会 事務局 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
北海道開拓記念館内
電話/011-898-0456・FAX/011-898-2657

平成20年度 北海道博物館協会 ミュージアム・マネージメント研修会報告

北海道博物館協会ミュージアム・マネージメント研修会が、10月23日、24日の両日、留萌管内苫前町にある「とままえ温泉ふわっと」で開催された。

研修会は、「自然と地域と博物館」をテーマに、博物館が担うべき役割を見つめなおすなかで、市民と共に歩み、市民と共に考え、活動する博物館活動をねらいに開催され、札幌、小樽、旭川、網走、帯広など全道各地から約40人が参加した。

1日目は、道北地区博物館等連絡協議会の加茂千秋会長があいさつし、苫前町教育委員会伊藤通康教育長が歓迎のことばを述べ、丹保憲仁北海道博物館協会会長が祝辞を述べた。

基調講演は、北海道開拓記念館の丹保憲仁館長を講師に「博物館と人」を演題として、約90分の講演を行った。

丹保館長は、「歴史から知ること。共生は共死と背中合わせにある。ヒトは、他の生物と共生しがたいほどに卓越種となり、母なる地球自体に「人間圏」を創ってしまった。」と話し、「人生は、何度も繰り返し学習することが大切である」と述べ、生涯学習の重要性についても述べていた。



とままえ温泉ふわっと「風Wホール」で講演する丹保北海道開拓記念館長



「自然と地域」についての事例発表を行う中川町の疋田吉識学芸員

休憩をはさみ、(株)乃村工藝社の中瀬尚子プランナーの司会進行のもと、中川町エコミュージアムの疋田吉識学芸員、士別市立博物館の水田一彦学芸員、留萌市海のふるさと館の高橋勝也学芸員の事例が発表された。

疋田学芸員は、エコミュージアムでの活動として、博物館ボランティアが各種の事業講師となり、「地域づくり」の中心となる「地域リーダーズ」になりつつあると話し、士別市の水田学芸員は、「博物館ボランティア友の会」を発足し、会員それぞれの得意分野をどう事業に結び付けていくかを模索していると話した。また、留萌市の高橋学芸員は、地域から「収集」した博物館資料を地域に「返す」事業展開として、小学校と連携して「総合的な学習の時間」などを活用しながら、学校に資料を持参して出向き、資料を生かした事業展開を行っている」と発表した。

2日目は、留萌管内中部三町の施設見学を行った。最初に、苫前町の「郷土資料館・考古資料館」次に、小平町の重要文化財「花田家番屋」、羽幌町の「北海道海鳥センター」を見学した。参加者は、各町村の施設担当者の説明に真剣に耳を傾けながら、メモや写真を撮っていた。

以上、館種を超えたネットワーク構築の必要性を考える研修会であった。

(苫前町教育委員会 泉 泰仁)

道央ブロック
News

100歳のニシムラ、10歳の美術館 特別な一年の新たな試み

2009年は、共和町出身の洋画家・西村計雄の生誕100年と、画家の故郷にある西村計雄記念美術館の開館10周年にあたる。生誕100年を記念し、西村計雄の個人コレクション(エコール・ド・パリの作家等による素描数十点)を初公開するほか、開館10周年を記念するしりべしミュージアムロード共同展やこれまでの教育活動を総括する展示などを準備中である。

二つのお祝いが重なるこの年を、これまで美術館に来たことのない方々にも関心を持っていただく好機ととらえ、新たな試みに挑戦する。その一つは、晩年の西村がお菓子などの空き箱に描いた「箱絵」を町内各所に展示する「西村計雄いっぱい計画」だ。当館では3,200余点の箱絵を所蔵しているが、展示の機会は限られている。目に触れる機会を増やすことで、町民の西村への親しみを醸成できればと考えた。今年は学校等の公共施設に限定しているが、この先、町内各商店の店先などにも会場が広がり、「ウチのニシムラ」自慢が繰り広げられる日がくると楽しい。

道南ブロック
News

企画展 「娯楽～人生を楽しもう～」の開催

旧檜山爾志郡役所(江差町郷土資料館)では、1月24日(土)から3月8日(日)まで、企画展「娯楽～人生を楽しもう～」を開催した。

この企画展の目的は、江差町や道南に伝わった娯楽資料を展示して、先人が人生をどのように楽しんでいたのかを紹介することにあつた。

明治元年(1868)に江差沖で座礁・沈没した旧幕府軍の軍艦開陽丸の遺物は、船体や武器など約32,000点に及ぶが、その中には骨角で作られているドミノ牌がある。

ドミノは、日本ではドミノ倒しで遊ぶことが多いが、外国ではトランプのように様々な遊び方のあるカードゲームとして楽しまれている。

ドミノは、当時の日本や北海道では一般的な遊びでなかったため、オランダに留学していた榎本武揚たちによって遊ばれていたのだらうと推定されるが、戦いの最中にドミノに興じていた彼らの姿を想像するのも興味深い。

また、室町時代に渡島半島西部の拠点であった勝山館(上ノ国町)からは、盤双六の駒が出土して

また、ミュージアムロード共同展では、岩内のゆるキャラ「たら丸」人気にあやかり、岩内・倶知安・共和のキャラクターを活用するイベントを考案中だ。これまで、町のマスコットを活用することは思いもつかなかったが、皆おもしろがってアイデアを出し合っている。

さらに、美術館の主催事業ではないが、共和の農業青年有志が、美術館の敷地内で西洋野菜などの直売を計画中だ。フランスで活躍した西村にちなみ、「マルシェ」と銘打つ。質の高い共和の野菜たちが美術館を訪れた人たちの食卓を彩る、と、考えただけでうれしくなるが、「市」という場で起こることを想像すると、もっとわくわくしてくる。

一方で、これまでの活動について検証する節目の年でもある。当館入口横に、フランスの方角を示し「パリ9,053km」と記された道標がある。設置のきっかけとなったのは、西村の教え子である永六輔氏からの「『パリまで何キロ、ここが地球の真ん中です』というメッセージを、町の子どもたちに伝えては」という提言だった。これから、この美術館は、誰に向けて、何のために、どんなことをしていくのか。美術館の運営に関わる人たちが共有できる活動の道標を建て直す1年としたい。わくわくしながら、たのしみながら。

(西村計雄記念美術館 磯崎亜矢子)

いる。盤双六とは、サイコロを振って駒をゴールに進めるボードゲームで、正倉院宝物にも見られ、江戸時代までは身分にかかわらず親しまれていたようだ。

この企画展では、外にも様々な娯楽資料を展示したが、その大部分については複製品などを作成して、入館者が楽しめるコーナーを設けた。

囲碁・将棋・盤双六など、子供たちがルールを知らないであろう娯楽については、江差町図書館から入門書を借りて開架し、一部の娯楽についてはルールをペーパーにして共に遊んだ。

当館では、企画展や教育普及活動などによって、地元に住む町民により多く入館していただく工夫を行なっている。今後もこのような取り組みを続けていきたい。(江差町郷土資料館 宮原 浩)



展示室で遊ぶ子供たち

道北3管内
News

「増毛山道の復活」 ただいま進行中

増毛一札幌間を結ぶ国道231号線が全線開通したのは昭和56年。それまで増毛町の最南端に位置する雄冬地区は陸の孤島と呼ばれ、周囲を断崖絶壁に囲まれ、増毛との行き来には「増毛山道」という山道が使用されるのみだったのです。

増毛と雄冬、更に南の浜益を結ぶこの増毛山道は、国道開削以来誰も利用するものがいなくなって数十年が経過し、現在ではその痕跡を探ることすら困難になっていますが、その増毛山道に最近スポットが当てられ、もう一度その道を復活させてみようという動きがここ数年活発になっています。

増毛山岳会からの提案を受け、元陣屋では長年山道開削について研究してきた伊達東氏から資料などをご教示いただき、山道部分の航空写真を撮影した小杉測量設計の小杉社長から写真資料をお借りして、昨年6月に増毛山岳会との共催で特別展「増毛山道～失われた道を迎える～」を開催いたしました。急峻な海岸部分を迂回するために増毛町別荘から浜益の幌へと続くこの山道は総延長距離13里、途中雄冬山(1197m)、浜益御殿(1038

m)を経由しています。山道途中には合計18個の一等水準点が設置されており、そのうち8462番の標高は1037.8m、北海道でも一番高緯度にある水準点です。

山道が開削されたのは安政4年、当時増毛場所を請け負っていた商人伊達林右衛門が自費により着手しました。この年できたばかりの山道を松浦武四郎が踏破し、「中三間半に切て、実に目を驚かす計の事」と日誌に記しています。

特別展では会場の床面に全長6メートルの巨大な航空写真を配置し、まさに鳥の目で往時の山道を追う事ができるようにし、伊達氏や小杉氏のインタビュー映像、昔の駅逓写真、駅逓跡から出土した食器類などを展示しました。近年中高年の方を中心にフットパスと呼ばれる歩く道が静かなブームを呼んでいる事もあってか、多くの来館者に展示をご覧いただく事ができました。こうした一連の盛り上がりを受け、今年に入ってから増毛山岳会・黄金山岳会(浜益)の有志や伊達・小杉両氏などが参加して「増毛山道の会」が発足、本格的に山道の復活へと向けて活動が開始されています。私も個人的に参加させていただいているのですが、この活動が実を結び実際に山道を踏破できたときどんな光景が見られるのか、今から楽しみでなりません。

(増毛町総合交流促進施設元陣屋 小野 卓也)

日胆地区
News

胆振・日高を泳いだクジラ

日高管内平取町で発見されたクジラの頭の化石です。後頭部から目の少し前、鼻の付け根くらいまでが見つかりました。クジラは鼻の孔が頭の中ほどにあるので、見つかったのは頭の後ろ半分くらいになります。大きく三角形をした後頭部の骨が前方へはり出していることから、ヒゲクジラの仲間と考えられます。ヒゲクジラは歯の代わりに「ヒゲ板」を持ち、小魚やプランクトンなどをエサとしているクジラです。

発見者は、以前に穂別町内に住んでいた、ということで、穂別博物館へ連絡を下さいました。現地を案内して頂き、石に包まれた状態のクジラ化石を博物館へ持ち帰ることができました。化石を傷つけないように気をつけながら、まわりの石を少しずつつけずり、いくつもの破片に割れていた化石を互いに接着しました。しばらく時間がかかって、やっと全体の姿が分かるようになりました。

このクジラが生きていたのは、約1600万年前。恐竜時代はすでに終わり、たくさんいたアンモナイトやクビナガリュウは遙か昔に姿を消していました。彼らに代わって海に登場したのが、アザラ

シヤクジラ、イルカなどの哺乳類です。当時は日高山脈ができた頃ですが、北海道は広く海におおわれていました。北海道各地はもちろんのこと、穂別や近隣の平取、門別などでも、この時代からたくさんクジラ化石が見つかっています。しかし、この地域の化石は断片的な標本が多く、くわしいことは良く分かっていません。今回発見されたクジラ化石は頭の大きな部分が見つかり、今後の研究が期待されます。

一億年前の海を泳いだクビナガリュウやアンモナイト、その後に出現したクジラやイルカ。海の底がめくれ上がった日高山脈。胆振と日高の境い目には、北海道の成り立ちをさぐる証拠が眠っています。(むかわ町立穂別博物館 櫻井 和彦)



平取町で見つかったヒゲクジラの頭の化石。向かって右側が前方。見つかった長さは約56cm。中新世中期(約1,600万年前)と推定。

道東3管内
News

ミンククジラの 骨格標本の展示

釧路市立博物館では、平成21年4月29日に、ミンククジラの骨格標本が新たに展示品として加わりました。25年ぶりの中規模の展示替えでした。標本の元になったミンククジラは、平成17年9月に釧路沖鯨類捕獲調査で最初に捕獲された個体で、全長7.52メートル、体重5.5トンの雄で、年齢は20歳と推定されました。1階にある「釧路の海」のコーナーの一角に、今回の骨格標本を天井から吊り下げて展示しました。その周囲にはコンブ類、貝類、カニ類、魚類、海産哺乳類など多様な生物が配置されているので、釧路の海の豊かさを示す象徴的な存在となりました。

この展示を切っ掛けにクジラ類に関する、さまざまな興味ある事実を知ることができました。たとえば、ミンククジラをはじめシャチやイルカなどを含めると14種ほどのクジラ類が、釧路沖に回遊してくるようです。そのミンククジラがサンマ、スケトウダラ、カタクチイワシ、ヤリイカなど漁業上重要な種類を大量に食べており、海の世界連鎖と漁業の問題を考えさせられました。

過去に遡れば、約6,000年前の縄文時代前期の東釧路貝塚から、アサリ・カキなどの貝類、ニシン・ブリなどの魚類、トド・アシカなどの海産哺乳類の骨が出土していますが、これらの中に放射状に配列したイルカの骨も出土しております。また、約2,000年前の縄文時代晩期の幣舞遺跡からはイルカの頭骨やクジラ骨が出土しており、かなり古い時代から鯨類を利用していたようです。

さらに、釧路の石炭採掘が、太平洋における外国の捕鯨と深い関わりがあります。鎖国下にあった嘉永6(1853)年、アメリカからペリー艦隊が来航し、日本に開国を迫りました。翌年に「日米和親条約」が結ばれ、下田と箱館(函館)が開港することになりました。条約の締結は日本近海で操業しているアメリカの捕鯨船や外国汽船への食料や水、薪そして石炭の供給が目的でした。石炭は海岸に近くて運搬しやすい、釧路オソツナイ(釧路市益浦)の海岸露頭炭を採掘して箱館まで運搬していました。北海道での初めての石炭採掘です。これが契機となり、北海道における石炭開発が始まりました。

釧路が縄文時代から今日まで、クジラとたいへん深く関わってきた街であることを改めて知る機会となりました。

(釧路市立博物館 針生 勤)

網走管内
News

平成20年度 網走管内博物館連絡協議会研修会

平成20年11月21日、網走管内博物館連絡協議会後期研修会をくねっぶ歴史館(訓子府町仲町)で開催しました。

本研修会は、協議会に加盟する管内市町村で開催地をかえながら、職員の専門的知識や技術の向上を目指して毎年開催しています。また、テーマは担当する市町村で選定しています。

今年度の担当町である訓子府町が選定した研修会のテーマは、時代の流れとともに失われつつある地域の歴史・生活・文化を考えるとして、講師に旭川市在住の美馬栄一さんを迎え、「故郷(ふるさと)と心をつないだ鉄路を見つめて～鉄道員44年の人生を語る」と題し、お話を伺いました。

平成18年4月20日、北見市と十勝池田町を結ぶ鉄道「ふるさと銀河線」が最後の運行を終えました。明治44年の網走本線開通は、当時の開拓者に希望の光を投げかけ、その後も沿線地域住民の生活を支え続けましたが、95年にわたる歴史の幕を下ろしたのです。

美馬さんは、旧国鉄時代から鉄道員として従事

し、ローカル線廃止、銀河線の開業と廃線をホームで見つめてきた人であり、訓子府駅長として町民との関わりも深い方であるため、その美馬さんから直接お話を伺うことは、訓子府町にとって、また、沿線地域の住民として、とても意義あることでもありました。

なお、今回の研修会では、この様子を今後も映像資料として活用するため、ビデオカメラに収めています。

廃線後、ちほく高原鉄道株式会社から実際に鉄道で使われていたレールや踏み切りの遮断機、駅長室で使用されていた事務用品などを教育資料として多数譲り受けました。しかし、人の語り(言葉)によって伝えられる歴史は実物資料とともに大変貴重なものであり、その語りをどのようにして記録・保存するかも本研修会のテーマでした。

元訓子府駅長の美馬さんからお話を伺うことで、失われつつある地域の歴史＝財産をいかに後世に伝えるかを参加者といっしょに考える研修会となりました。

(訓子府町教育委員会 社会教育主事 佐藤 貴裕)

動物園・水族館
News

サケの稚魚 放流体験実施中

雪解けが進み、日差しにも春を感じます。春はサケの稚魚が海へ旅立つ季節で、千歳川でもたくさん見られるようになりました。その稚魚のほとんどは、上流にある水産総合研究センターさけまですセンター千歳事業所で放流されたものです。千歳川では秋にインディアン水車で捕獲されたサケ親魚から採卵受精後、稚魚まで飼育され、3月から4月にかけて毎年3千万匹もの稚魚が放流されています。

千歳サケのふるさと館でも、3月から5月まで入館者を対象に稚魚の放流体験を行います。体験用の稚魚は秋にサケの親魚を展示した後、ふるさと館で採卵して飼育したもので、午前11時と午後2時の一日2回、また団体の場合は事前予約で来館時間に合わせて実施します。その内容は、まずカップに稚魚を2匹ずつ準備します。参加者にサケの回遊経路などを説明した後、館外に出てサーモンパーク内を流れる小川に放流していただき、記念カードを差し上げるというものです。

稚魚が成長して無事千歳川に帰ってくるのは、

産卵から4年後が主流です。つまり、今年の稚魚では2012年、しかもその数は100匹中1匹いるかないかので、稚魚にとっては厳しい旅です。自分が放流した稚魚が、無事親となって千歳川に帰ってくるかもしれない。参加者の期待や願いのもと、稚魚は旅立っていきます。

幼児から大人まで気軽に参加できる放流体験は、定番の体験メニューで人気もあります。多くの方に参加していただきたいと思います。

(千歳サケのふるさと館 荒金 利佳)



サケの稚魚 放流体験の様子

学芸職員部会
News

学芸職員部会 研修会は稚内で

平成21年度北海道博物館協会学芸職員部会は稚内北星学園大学を会場とすることで準備を進めている。

ここで開催することの契機は北海道博物館協会ホームページの開設である。ホームページ開設の準備と内容作成は稚内北星学園大学情報メディア学部高谷邦彦准教授にお願いした。立ち上げるべきホームページ作成に向けて、具体的な準備が進められていなかった事による。

インターネットの普及から北海道の博物館などの情報発信が話題となって、ホームページを立ち上げるべきと話し合われてきた。その準備作業は学芸職員部会に委ねられていた。準備を進める中で大きな課題となったのはホームページデザインの担当、サーバーを加盟館園施設に置けるかどうか、開設後の更新と情報発信はどうするのかなどであった。

作業に向けて悩んでいるときに、第1回学生デジタル作品コンテストで稚内北星学園大学情報メディア学部研究生の作品が最優秀賞を受賞した新

聞記事(北海道新聞2008年3月7日)に出会った。この記事を見てホームページデザインを情報メディア学部の学生に作ってもらい、ドメイン、サーバー維持の適切な処置に稚内北星学園大学に関わってもらうことで、延び延びになっている北海道博物館協会ホームページを開設できないかと考えた。

快く応じていただき、何とかホームページを開設することはできた。しかし、内容はまだ不十分などところがある。それらの修正とこれからの情報更新など、学芸職員部会がどのように担っていくのかを学芸職員部会として煮詰めていかなければならない。

そのために情報発信の技術的なことや操作の仕方などを学芸員が学ばなければならないだろうと思った。北海道博物館協会ホームページを作成してくれた稚内北星学園大学が学芸職員部会研修会場として好適な箇所であると考えた。

開催時期は9月上旬を予定している。北海道博物館協会ホームページのことだけでなく、それぞれの館園などでの情報発信について、技術・操作取得につながっていくことができると考えている。

(北海道博物館協会学芸職員部会長
利尻町立博物館学芸課長 西谷 榮治)



プラネタリウムの 実践的な学習利用について

現在、当館のプラネタリウムでは学校連携事業の一環として、小中学校教諭と協力し、新しい学習利用方法の検討を進めている。

小中学校で学習する天体分野については、学校の通常授業の中では立体的な空間のイメージが難しく、星の動き方や観察方法などを理解させづらいことや、夜間観察会を行うにあたっては天候に左右されるなどの課題がある。そこでプラネタリウムの星空を利用してこれらの問題の解決、新たな指導方法を確立するのが今回の計画の主な趣旨である。

現時点では市内小学校の協力で2回の試行を行ってきたが、基本的な実施方法としてはプラネタリウムの星空の下、夜間観測会と同様の手法で授業を行うというものであり、学校教諭の指導の流れに添って、プラネタリウム投影者がその星空を作り出していく形となっている。

この取組における利点としては①実際の星空の下、星座の位置や動きを確認することができる②その場で星の動きの書き取りや双眼鏡を使った観

察ができる③児童・生徒の理解度を随時確認することができる④天候に一切左右されず、常に理想的な条件で行うことができる⑤星の動きを自在に操作できるため、本物の夜空では長時間かけて行う太陽や星の動き方を短時間で観察することができる⑥他地域の星空や稀にしか起こらない天文現象を再現できるなどといった点があげられ、授業で利用する条件としては通常の教具はさることながら、本物の夜空の下で行う以上の効果が期待できると言える。

これからの課題については、①学校の通常授業とは異なるため、数回の事前打ち合わせが必須となること②小学校の理科専門ではない教諭にとって星空の下での授業がなかなか困難であること③科学館の隣の学校であれば利用しやすいが、遠方の学校では交通手段や移動時間についての課題があることなどが考えられ、これらを今後学校教諭との話し合いの中で解決していきたいと考えている。

最後に今回の取組はまだ試行の段階であるが、今後はより実用的な運用方法の整備や教員研修会での利用など様々な場面での活用の方法の検討を行い、より効果的な学校との連携をすすめていきたいと思う。

(旭川市博物科学館 栗山 隆広)



第17回北海道美術館 学芸員研究協議会報告

3月5日・6日の2日間にわたり、北海道立近代美術館において、第17回北海道美術館学芸員研究協議会が開催された。全道の美術館・博物館学芸員及び博物館学、美術史研究者からなる69人の会員に、今年はさらに5名の新会員が加わり、オブザーバーも2名が参加。初日は、奥岡会長のあいさつにはじまり、総会のあとに続く研究協議は、今年はテーマを「美術館とコレクション」と題して進行。佐藤副会長のあいさつでは、日本の近代美術館が政府主催のパヴィリオン＝見世物小屋としてスタートしていることにはじまり、現代にいたってもコレクションすること、コレクションそのものの重要性はなかなか認識されていないのではないかという、重要な提議から幕を開けた。まずはこの会期にあわせて集約した加盟館のコレクション状況のアンケートについて報告。31館の回答を得て、道内の美術作品は35,425点に及ぶことや、いくつかの館に意外なコレクションが存在することなどの発見を報告。次いで札幌芸術の森美術館のコレクション内容、小樽美術館の学校連携によるコレクション利用の事例にはじまり、北

大の鈴木准教授の日本美術の美術館における役割、神田日勝記念美術館のシンポジウムにみるコレクションの評価といった事例報告があり、それぞれの館でのコレクション利用についての事例をもとに全体討議がなされた。

二日目は、午前の時間をフルに使い、同会でも初めての試みである会員によるワークショップを行った。6グループに分かれてコレクションを活かすアクション・プランのアイデアを出し、それぞれの方向性別に「美術コレクションを活かす3つの方法」として発表した。共通してみられたプランは、移動展を中心とした発想で、コレクションの交換展や貸出など、館外での露出機会を増やすことの提案がめだつた。次いでグッズ化、映像化、イベント開催など、プロモーションの重要性を考えた案も多かった。それらは既に近いかたちで実行されているものもあれば、学芸員が日ごろから考えていてなかなか実行できないでいることが噴出した感もあり、美術館、博物館といってもさまざまな運営形態があつて、結局はそれぞれの体制で実施していくことの困難さをあらためて痛感したといってもよいかも知れない。しかし、いつの時代になろうと、コレクションあつての美術館、博物館の理念を揺るがしてはならない。

(北海道立近代美術館 主任学芸員 久米 淳之)

アイヌの歴史と文化に焦点を 旭川市博物館がリニューアル

旭川市博物館は平成5年に旭川市郷土博物館から名称も一新し、現在地にオープンした。常設展示室は地階と地上階の2層構造。地上階は古代から現代の住居を並べ、北国における寒地適応の実態を住居の移り変わりによって紹介するテーマ展示、地階は上川盆地の古代から現代の生活資料と地質・動物・植物資料を展示してきた。

しかし開館からすでに15年が経過し、博物館の新たな魅力の発信が課題となっていた。そこで今回、先住の民であるアイヌの歴史と文化の紹介に焦点を当て、地上階のテーマ展示をリニューアルした。

昨年11月1日のオープン以来、入館者は同期の2倍以上に達している。だが、それ以上に職員を喜ばせているのは、お客様の滞在時間が平均1時間以上と大きく拡大し、「見応えがあったよ」「展示室が美しいね」と口々に職員に声をかけてくださることだ。リニューアルの手応えを日々実感している。

さて、今回のリニューアルにあたって柱としたのは次の3つだ。

ひとつは、当館が所蔵するアイヌをはじめとする北方民族のコレクション。展示スペースの関係もあって、これまではほとんどご覧いただくことができなかつた。2千点以上におよぶこの貴重な資料を、できるだけ多くのお客様にご覧いただけることを主眼に置き、その約1割250点ほどを展示することができた。

2つめは、現代に生きるアイヌ文化の紹介。当館の展示は、アイヌの紹介が近世で終わっていた。そのためお客様から「アイヌの方たちはもう旭川にはいないのか?」「アイヌ文化は伝承されていないのか?」としばしばたずねられた。この歯がゆさもあって、生き生きとした文化伝承の現在を伝えたいと考えてきた。

展示にあたっては、多くの地元のアイヌの方々に作品の製作を依頼し、作り手の想いも感じられるよう製作者の写真を添えた。さらに工芸だけに偏らないよう、アイヌ語教室の活動などもビデオで紹介した。サケの稚魚放流にあわせておこなわれるカムイチェップノミの様子など、アイヌと和人が共同で活動を繰り広げている実態を紹介するよう、とくに心がけた。アイヌのミュージシャンOKIさんが、リニューアルの趣旨に共感し、博

物館のため製作してくれたテーマ曲も、このコーナーの大きな魅力になっている。

3つめは、最新の研究成果にもとづくアイヌの歴史の紹介。自然との共生の側面ばかりが強調されてきたアイヌの人びとだが、実際には交易民や農民など多様な性格をもっていたことを中心に紹介した。とくに、古代から中世のアイヌがサハリンやカムチャツカまで進出し、大モンゴルと戦争をおこなっていた事実に興味をもつ方が多いようだ。先日、内モンゴル自治区のテレビ・クルーが来館したので、このコーナーにどのような反応を示すか興味津々だったが、案の定全員が驚き、時間をかけて取材していった。

歴史展示では、人間的なあたたかみや親しみを感じられるよう、等身大の人物像を多用したが、この造形にあたってはアイヌの方々と入念に打ち合わせをおこなった。交易民としてのアイヌを強く印象づけるため、蠣崎波響の「夷酋列像」をもとにイメージ造形したアイヌの首長像は、とくにアイヌの方々の共感を得ているようだ。「列像」図成立の学術的な問題点については承知のうえで製作に踏み切ったが、コーナーの核として、インパクトを与える展示にすることができた。

ところで、リニューアルとはいっても、既存の各時代の復元住居を撤去することは困難で、実際には住居と住居のあいだのごく狭いスペースをどう生かすのか、という点に知恵を絞らざるをえなかつた。展示はストーリーよりもスペースに制約され、そのため3つの柱を十分には実現できなかったのでは、との思いもある。

しかしこの北海道にあっても、アイヌの歴史や文化の紹介に大きく比重を置いた博物館はけっして多いとはいえない。その現状を考えれば、地方の一博物館にすぎないものの、まずは舵を大きく切ったという点で、当館の試みもつ意味はけっして小さくはない、と信じてたい。

(旭川市博物館 瀬川拓郎)



第48回北海道博物館大会が、 6月4日(木)・5日(金)の両日に、富良野市で開催されます。

- 大会テーマ：「五感を呼び覚ます博物館活動
～豊かな感性・知的好奇心・想像力を育むために～」
- 会場：富良野文化会館2階 大会議室
- 6月4日(木) 10:00～17:10
主なプログラム
- ・特別講演「日本の森に培われた暮らし」(13:00～14:15)
講師：濫澤 寿一氏 (NPO法人樹木・環境ネットワーク協会 理事長)
 - ・シンポジウム「五感を呼び覚ます博物館活動
～豊かな感性・知的好奇心・想像力を育むために～」
コーディネーター：倉橋 昭夫氏
(富良野市生涯学習センター ボランティア友の会会長)
 - パネリスト 1：濫澤 寿一氏
(NPO法人樹木・環境ネットワーク協会 理事長)
 - パネリスト 2：大鹿 聖公氏
(北海道教育大学旭川校理科教育研究室 准教授)
 - パネリスト 3：齋藤 典世氏
(NPO法人C・C・C富良野自然塾 フィールドディレクター)
- 6月5日(金) 9:00～12:00
主なプログラム
- ・見学会(9:00～11:50)
C・C・C富良野自然塾の環境教育プログラム体験、富良野市博物館見学。

□第57回全国博物館大会が、平成21年10月1日(木)・2日(金)の両日に、旭川市大雪クリスタルホールを会場として開催される予定です。詳しくは、改めてご案内させていただきます。



□5ページの「学芸職員部会News」で紹介されていますように、北海道博物館協会のホームページが開設されました。現在、「TOP」「事業」「組織・役員」「北海道学芸職員部会」「リンク集」の5つのコーナーから成っています。ぜひアクセスしてみてください。

<http://www.hokkaido-museum-society.net/index.html>